

吉見信頼の加勢を得て、長門国に侵入した。しかし、長門国賀年かねにおいて陶弘護軍に敗れ、豊前へ逃亡し、馬ヶ岳に籠城したが、文明三年正月二十五日自殺したという。大内道頼について、従来の諸書が誤った記述をしていることが、先掲の史料で明らかである。

大内政弘の豊前・筑前奪回 文明八年（一四七六）八月、將軍と和睦した大内政弘は翌年十一月帰国し、失った旧分国の奪回にとりかかった。文明十年八月、自身豊前へ渡り、九月、太宰府で抵抗する少弐頼を斬って、豊前・筑前を平定した。

九月二十五日には、杉彦六重治へ本領仲津郡石丸五町地などを還補げんぷするなど、知行宛行を発表し、十月三日、少弐方として行動した仁保新右衛門尉弘名が彦山座主頼有の計略で捕らえられ獄門に処せられた。

この月、太宰府の大内政弘のもとへ、続々と入国の祝言を述べべく出頭する者や御使がやってきた。その中に豊前国分寺住持（神代左馬允貞賢さだかたの弟）、守護代杉伯耆守武勝、鈴隈寺住持、馬ヶ岳城督右田弥三郎弘量、佐田因幡守忠景、仲間若狭守盛秀、彦山座主頼有法印とその子息帥律師もろぢの名があった（『正任記』）。

五 馬ヶ岳の合戦と郷土武士

大内・大友の調略合戦 父大内政弘に続いて、二十歳ぐらいの若さで大内家督の座に就いた義興よきは、前公方義材よきを奉じて入洛し、一〇年余りも幕政を牛耳ることになるが、その初期は、豊筑において、激戦きせんを

続けた。

豊後の大友政親は、大内政弘の妹婿であり、年齢もほぼ同じであったこともあって、初めは友好的で、文明元年（二四六九）七月、少弐政資が対馬から宗貞国らに支援されて博多に上陸し太宰府へ入ろうとする行動に対し、留守を預かっていた大内政弘の代官陶弘護を援助したが、父親繁に戒められて、逆に少弐氏を援助するに至った。

文明五年（二四七三）、六十一歳の親繁は豊前国の守護職などを政親に譲った。政親は文明七年ごろ、豊前守護職を大内道頓へ明け渡した（『大友家文書録』）。その後、豊後では大友政親と嫡子親豊（材親・義右）との間に、不幸な対立が生じた。いったん和解したかに見えた親子は再び対立し、ついに親豊は毒殺された（明応五年＝一四九六＝五月）。政親は家臣たちに見放され、筑前立花城の立花氏を頼って、舟で関門海峡を通過中、大内方に捕われ、赤間関の地藏院に幽閉され、家臣とともに自刃させられた。

親豊・政親の死で、大友家を親治の子義長が継いだ。実権は親治（政親の弟）が握っていた。大内義興は大友親綱の子大聖院宗心を還俗させて、大友家督に据えようと、大友氏加判衆の一部や、国東の田原親述兄弟を動かして画策した。これに対して、大友親治も大内義興を廃して、氷上山興隆寺の僧尊光（義興の弟）を大内家督とする工作を大内家重臣杉平左衛門武明らと進めたが、失敗し、杉武明は自殺し、尊光は豊後に



第2図 馬ヶ岳城跡

亡命して、大内太郎左衛門高弘と称し、大友氏食客となって、帰国の機会を待つことになった。こうした両者の動きから、大内義興と大友親治の關係は悪化の一途をたどった。

大友親治の

明応八年（一四九九）、前將軍足利義種（義材・義尹）が山口へ亡命してきた。義種は管領細川

豊前進入

政元と対立して、京都を逃れ、越中へ下っていたが、近江まで進出して、また敗れ、大内義興を頼って西下したのである。細川政元は、大友親治をはじめとする周辺の大名に呼びかけ、大内義興を討伐させ、公方義種の上洛を阻止しようとした。

明応六年（一四九七）、大友親治は豊筑侵入を開始し、大合戦が始まった。少弐政資も同時に筑前高祖城（前原市）に挙兵し、太宰府を占領した。しかし、大内義興に攻められて、岩戸城に籠城した少弐政資はこども攻略され、肥前小城晴氣城から多久城へと追い詰められて自殺し、少弐氏は断絶した。

宇佐郡佐田庄（安心院町）に住んだ宇都宮泰景は、明応七年十月二日、豊後の大軍の侵入を受けて、菩提寺に、父俊景とともに立てこもったが、維持できず、隣村の飯田但馬守の城へ移って、大内軍の到着を待った。

このときは、援軍が到着したものの、敗れて防長へ亡命したらしい。

明応八年七月、佐田泰景らは、周防から帰国し、築城郡寒田まで



大友親治の花押



足利義種の花押

進撃し、十月上旬、宇佐郡院内衆とともに妙見岳（院内町）に築城し、籠城した（第3図参照）。やがて、豊後一国の大軍が妙見岳を包囲し、切り崩しを試みたが、攻略困難とみて、速見・国東衆を残して豊前西部を征服したのち、再度攻撃をかけてきた。孤立した妙見岳城衆は降伏して豊後府内に幽閉された。

明応九年（二五〇〇）正月、佐田泰景は府内を脱走して佐田庄へ帰り、すぐ馬関の豊前衆のもとに駆けつけた。

文亀元年（二五〇二）正月、亡命中の宇佐郡衆は、中津河へ渡海し、妙見岳城を奪回した。佐田泰景も遅れて中津河に上陸し、城井日向守直重（正房の後見）が立てこもる城井本庄城攻囲軍に参陣した。同年七月、馬ヶ岳合戦では（第2図参照）、佐田泰景は守護代杉重清とともに、後陣として宇佐郡笠松に布陣し、豊後軍を撤退させた。

杵尾崎の合戦

文亀元年（二五〇二）閏六月二十四日、大内方の大将仁保左近将監護郷もりさとが、仲津郡杵尾崎人を出す大敗を喫し、自身も戦死してしまった（『三浦家文書』八七）。

その一か月後の七月二十三日、小馬ヶ岳の麓において、大内軍と大友・少弐連合軍との大規模な戦闘が行われ、両者多数の犠牲者を出して、大友方が豊前から退去した。



第3図 妙見岳城跡

將軍義植を追放した細川政元は奇行が多く、永正四年（一五〇七）六月、薬師寺長忠らによって、湯殿で殺害され、政元の養子澄元も細川高国に敗れて近江へ逃れたため、前公方義植に帰京のチャンスが到来し、大内義興に守られて、永正五年入京した。

大内義興の全盛

公方に還補げんぷされた義植たむ（義材・義尹）は、細川高国を右京大夫に任じて管領とし、大内義興を左京大夫に任じて管領代とし、幕政に参画させた。大内義興は、中国・九州の分国から万余の大兵を動員して入京し、約一〇年間、京都にとどまって周辺の大名を屈服した。

この大兵を養う必要からか、大内義興は、従来の段銭に代わって、段米を徴収し、分国で実施していた撰銭方式二割銭（二〇〇文中二〇文は永楽銭・宣徳銭などの良銭であること）を京都においても実施させた。

段銭は毎年八〇文を春秋四〇文ずつ二回に分けて徴収した。各郡に二〜七人の段銭奉行を置き、滞納かまが高んだ場合は、土地を差し押さえ、年貢から未納分を差し引いた。

分国の農民は、年々大規模かつ長期化する戦争に、陣夫とか、城誘人こしらえ夫として駆り出されて苦しんだ。



大内義興の花押



第4図 沓尾崎

宇佐郡妙見岳や京都郡障子ヶ岳の築城には、豊前一国中の農民が動員されており、陣夫も険しい山坂を食料や武器などを運搬させられる辛苦は、私たちの想像を絶するものがある。

大永五年（一五二五）、大友義鑑が、大内義興の要請にこたえて安芸国に派兵するような、安芸国への戦争動員に疲れた筑前国では、大内勢の留守を衝いて、徳政令を要求する大規模な土一揆が起こり、張本人四人を誅し、土民への徳政を行わないと宣している（『大内家壁書』）。

このころには、生産力発達の遅れていた九州にも、有力名主層の指導のもとに、惣村・惣庄的な自治組織ができていたが、これら名主たちは守護代クラスの有力武士の被官となつて、状況によっては、莊園領主に抵抗したり、守護大名に抵抗するようになった。

朽網親満と道場寺 宇佐宮『永弘文書』に次の史料がある。

（首闕）道場寺まで御下候処、政定（田原）その面（おもて）二発足し候間、利行掃部助方二再三申され候通り承り及び候、内々御心得に入るべき子細候、何様此方の時宜、重々申入るべく候、御意を得べく候、恐々謹言

（永正十四年）
二月廿八日

氏輔（花押）

吉弘新兵衛尉殿御宿所（親達）

この史料の意味は、豊後府内で反逆者として追討を受けた朽網兵庫頭親満が、豊前の道場寺（行橋市）に潜伏中、国東の田原親述（うかのぶ）の弟政定が道場寺へ出かけ、朽網親満の家臣吉弘新兵衛尉親就と、大聖院宗心を大友家督とする計画を練ることを、宇佐宮番長永弘氏輔から伝えたものである。大分県では道場寺を玖珠郡のことと誤って久しい。

この後、朽網親満は伊良原に移り、彦山との旧縁を頼って帰国の機会をうかがい、永正十四年（二五七一）豊後府内に近い高崎山へ登って形勢の挽回ばんかひをねらったが、豊後の主な武士は、大友親治への忠誠を誓って動かず、親満は高崎古城を攻撃されて城を落ち、秋月・太宰府方面へ逃亡したようである。

朽網氏は、鎌倉初期、大友氏に従って豊後へ下向し、九重山麓の直入郡朽網郷に住んで、大友氏譜代の家臣として仕え、十五世紀には家老となって、三代にわたって活躍した。朽網親満は、大友親治の家老を一三年間ほど務めた。その間、肥後の菊池氏を滅亡させることに殊功を挙げ、武将として名声を強固にしたが、大友親治の不興を買ったのか、家老の座を降ろされた。これを不満としていたか、大友親治の孫義鑑の初政である永正十三年、謀反人として追討された。

親満が亡命した後も、玖珠郡の武士や国東の田原親述・佐伯惟治こいはるらは連絡をとりながら反旗を掲げ続け、不穏な情勢であった。

この事件について、大内義興は大友親治に好意的で、玖珠郡から宇佐郡へ逃げ込んだ親満残党の討伐に協力し、大友家加判衆から「両家無二御契約歴然候」（『永弘文書』三月二日付）と感謝されている。そうした情勢下で、道場寺・伊良原・彦山辺では、朽網親満をかくまう人々がいたのである。どのような人々であろうか。



大聖院宗心の花押



朽網親満の花押

道場寺といえは、文明十八年（二四八六）三月、大内政弘が山口善福寺造営料所として道場寺領一二町余を寄進している。道場寺の前住持暁光が僧として「本末の旨」を知らず、俗人と異ならぬ生活をしているという理由で、寺領を没収され、その身は追放された。大内政弘の勘気を被ったのであろう。

六 大内義隆と大友義鑑の対立

勢場ヶ原合戦

享禄元年（一五二八）、大内義興が死去し、子息義隆が二十二歳で跡を継いだ。若い義隆が、享禄四年菊池氏を支援したことから、大友氏との泥沼のような戦争に突入してしまつた。

大友義鑑は、大内義興病死のころから、筑前への帰国の機会をうかがっていた少弐資元を助けて筑前に侵入させた。このため、大内義隆はタブーであった筑前の大友領である立花城や怡土・志摩郡を収め、一〇〇年前の大内盛見時代の争乱を再現することになった。

天文元年（一五三二）七月、大友義鑑は、將軍義晴の命令と称して、義隆の悪行が顕然となったので、近々豊筑に発向する覚悟であることを安芸の熊谷氏へ告げ、安芸国方面でも、武田光和・尼子経久、四国の河野通直・大洲宇都宮・村上宮内大輔と申し合わせて行動するよう要請した（『熊谷家古文書』）。翌月、大友義鑑は「大内家に対し、種々遺恨、さらに差捨てがたき子細がある」（『平林文書』）ので、無足不涯を問わず出陣するように豊後毛井村衆へ催促している。